

40

世界文学全集

悲しみよこんにちは／ある微笑／
一年ののち／ブラームスはお好き

サガン／朝吹登水子訳

世界文学全集 40

悲しみよこんにちは／ある微笑

一年ののち／ブラームスはお好き

フランソワーズ・サガン

訳者 朝吹登水子

*Originally copyrighted by Librairie Julliard, Paris. This book is
published in Japan by arrangement with Librairie Julliard through
the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.*

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／株式会社金羊社 製本所／大口製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／中田製函株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

悲しみよこんにちは	3
あ　　る　　微　　笑	105
一　年　の　の　ち	207
ブ　ラ　ー　ム　ス　は　お　好　き	305
フ　ラ　ン　ソ　ワ　ー　ズ　・　サ　ガ　ン	423

Bonjour Tristesse
Un Certain Sourire
Dans un mois, dans un an
Aimez-vous Brahms.....
by
Françoise Sagan

Originally copyrighted by Librairie Julliard, Paris.
Copyrighted in Japan by Shinchosha, Tokyo.

悲しみよこんにちは

悲しみよ さようなら

悲しみよ こんにちは

天井のすじの中にもお前は刻みこまれている

わたしの愛する目の中にもお前は刻みこまれている

お前はみじめさとはどこがちがう

なぜなら

いちばん 貧しい唇さえも

ほほ笑みの中に

お前を現わす

悲しみよ こんにちは

欲情をそそる肉体同士の愛

愛のつよさ

からだのない怪物のように

誘惑がわきあがる

希望に裏切られた顔

悲しみ 美しい顔よ

第一部

第一章

ものうさと甘さとがつきまとい離れないこの見しらぬ感情に、悲しみといういかめしい、りっぱな名をつけようか、私は迷う。その感情はあまりにも自分のことだけにかまけ、利己主義な感情であり、私はそれをほとんど恥じている。ところが、悲しみはいつも高尚なもののように思われていたのだから。私はこれまで、ものうさ、悔恨、そしてまれには良心の苛責（かじやく）さえも知っていたが、悲しみは経験したことがなかったのだ。今は、絹のようにいらだたく、やわらかい何かが私の上にのしかかって、私を他の人たちからへだててしまう。

その夏、私は十七だった。そして私はまったく幸福だった。『他の人たち』は、私の父と、その情人のエルザだった。私はこの不自然にみえる状態について、ここで説明を加えておかなくてはならない。父は四十歳で、妻をなくしてから十五年になる。父は若く、生活力にあふれ、豊かな前途のある男だった。それで、私は、二年前に寄宿舎を出たとき、父が女と同棲（どうせいき）するのも無理もないと思った。けれども、父が六カ月おきに女をかえることを認めるには、少し時間がかかった。しかし、やがて父の魅力、この新しい、気楽な生活、そして私の性質が、このような生活になじませていった。父は女たらしで、仕事じょうずで、いつも好奇心がつよく、飽きやすく、そして女にもてた。私は苦勞せずに、そして優しく、父を愛することができた。なぜなら父は親切で、気前がよく、ほがらかで、私にあふれるような愛情を持っていたからだ。私は、父以上に良い、そして面白い友だちは想像できない。その夏のはじめ、父は、夏休みの間、いまの情人のエルザが、一緒に住みにくることが、いやでないかどうか

か、私にきくほどの親切ささえあった。私は、心から賛成した。なぜなら、父にとつて女が必要だということも知っていたし、私のほうでもエルザが邪魔にならないことも知っていたから。彼女は背の高いあか毛の、半玄人^{くろうと}、半商売人で、スタジオでエキストラに出たり、シャンゼリゼーのバーに出入りしたりしていた。彼女は気だてがよく、玉の輿^{こし}にのろうというような野心は持っていなかった。もともと私たち……父と私とは、『出発する』ということに夢中になっていたもので、何ごとであれ異議を申し立てるところではなかったのだ。父はかねて地中海に面した海辺に、一軒はなれた大きな、白い、すてきな別荘を借り、私たちは、六月、暑さがはじまると、それを夢見ていたのだ。別荘は海を見おろす岬^{みさき}のさきに建てられ、松林で道路からかくされていた。そこから、石ころの小道が、波のうちよせる、赤茶けた岩にかこまれた金色の小さな入江へおりていた。

最初のころはまばゆいばかりのお天気がつづいた。私たちは暑さにうちひしがれながら、何時間も浜辺で

時をすごした。しだいに健康な小麦色に焼けていった。エルザは赤むけになってひどく痛がっていた。父は太りはじめた腹部が、ドン・ファンに似つかわしくないと考えて、ややこしい脚の体操をしていた。私は朝早くから海にはいった。冷たくすき通った水の中にもぐり、パリのすべての埃^{ほこり}、すべての陰を自分から洗いおとそうと、やたらに体を動かして疲れはてた。私は砂の上に寝そべって、一つかみの砂を手になぎり、指の間からやわらかい黄色の一すじのひものように流し落とした。それは時のように流れすぎて行くものにした。それはたわいのない考えだった。たわいのないことを考えるのはいい気持ちだった。夏だもの。

六日目に、私は初めてシリルに会った。かれは海岸に沿ってヨットを走らせていたが、私たちの入江の前で転覆した。私は、かれの持ち物を拾いあつめるのを手つだった。そして一緒に笑いこけながら、かれがシリルという名前であること、法科の学生で、そばの別荘に、母と夏休みをすごしていることを知った。かれは

ラテン系の顔をしていた。とても色が黒く、とても開けっぱなしで、なにか平均のとれた、人をいたわるような処のあるのが私の氣にいった。それまで私は、乱暴で、自分のことばかり考えている、とくに自分たちの青春に夢中で、そのなかに自分たちの空虚さの弁解や、悲劇のテーマを探そうとする、あの大学生たちを避けてきた。私は青年たちは好きでなかった。私はかれらよりも、礼儀と思いやりをもって話しかけてくれ、父親や愛人のような優しさを示してくれる、父の友人たちの四十代の男たちのほうをずっと好んだ。けれどもシリルは私の氣にいった。かれは背が高く、時によっては、美しく、信頼の念をおこさせるような美しさを見せた。私は父の醜さきらいとは同意見ではなかったが、——なぜといって、そのため私たちはしばしばつまらない人たちともつき合うようになったのだから——私は肉体的魅力がまったく欠けている人たちの前では、一種の居心地の悪さと無関心さを感じた。かれらの氣にいられることをあきらめている様子は、私には不愉快な不具ふぐのように思えた。なぜなら、氣にい

られること以外に私たちはなにを求めているだろう？ 私は今日になってもまだ、この征服欲の裏にかくされているのは、生活力の過剰や、争奪欲なのか、あるいは自分自身にたいして安心したいという、ひそかな、無言の、しかし根づよい欲求なのか、わからない。

シリルは帰るとき、ヨットの乗り方を教えてやろうと言った。私はいかにすることにすっかり氣をとられながら夕食に戻った。そしてほとんど、というか、ほんの少ししか会話に加わらなかった。私は父が神経質になっていることにもほとんど氣がつかなかった。夕食後、私たちは毎夜するようにテラスの長椅子いすに体をのばした。空は星がいっぱいにまきちらされていた。私は星をながめた。ぼんやりと今年は時期がいつもより早く来て、流星が空を乱れとおようになればいいと思いがら。けれども私たちはまだ七月の初めに入ったところで、星は動かなかった。テラスの砂利の上で蟬せみが鳴いていた。きつと何千匹もいるのだろう。暑さと月に酔って幾夜も幾夜も夜どおしこのようにやかましい声で鳴くのは……蟬はただ一方の翅はね鞘かぶをもう一方の翅鞘

にすりつけるものだと言われていたけれども、私はそれが發情期の猫ねこの声のように、本能的なのだから出る歌だと信じたかった。私はいい気持ちだった。小さな砂粒だけが、私のブラウスと肌はだの間で、快い睡気のおそって来るのをふせいでいた。この時、父が軽いせきばらいをして、デッキチェアーに上半身をおこした。「お客さまが見えるんだよ」と言った。

私はがっかりして目を閉じた。私たちはあまりにも平和だった。こんなことがそう長くつづくはずはなかった！

「だれだか早く言って……」と相変わらず社交界に渴望しているエルザは叫んだ。

「アンヌ・ラルサンだよ」と父が言った。そして私の方を向いた。

私は驚きのあまり、どう反応してよいかわからないで、父を見つめた。

「アンヌに、ファッションのコレクションであまり疲れたら来ないかって言ってみたんだ。そしたら……来るんだって……」

私はこのことは考えてもみないことだった。アンヌ・ラルサンは、死んだ母の古い友だちで、父とはほんの少しの交際しかなかった。けれども二年前、私が寄宿舎を出た時、父は処置に困って、私を彼女のもとへ送った。一週間でアンヌは私に良い趣味の衣装を調え、暮らし方を教えてくれた。それで私はアンヌにたいて情熱的な憧れあこがを抱くようになったが、アンヌはそれを器用にとり巻きの青年の一人にさしむけるようにした。だから私の最初のおしゃれと最初のいくつかの恋の戯れはアンヌのおかげだった。そして私は非常に感謝していた。アンヌは四十二歳だったが、大変魅力のある、非常に洗練されたひとで、高慢で人生に疲れた、冷淡な美しい顔をしていた。しいていえば、冷淡さがただ一つの欠点だと言ってもよかった。彼女は愛想がいいと同時に冷たかった。一貫した意志と人怖じさせる心の静けさが、彼女の全体に反映していた。離婚して自由だったけれど、愛人がいるというようなことは聞かなかった。それに、私たちは同じ種類の人たちと交際していなかった。彼女は上品な、頭

のいい、思慮ぶかい人たちとつき合い、私たちは父が望むただ美貌ひびょうでおもしろい、騒がしいお酒飲みの人たちとつきあった。きつとアンヌは、私たち——父と私——がもつぱら遊びやつまらないことをして日を送っているのを少し軽蔑けいべつしていたと思う。なぜならアンヌは何ごとによらずゆきすぎたことを軽蔑していたから……。

商売上の晩餐ばんさん（アンヌは洋裁の仕事をし、父は広告の方をしていた）、母の思い出、私の努力——なぜならアンヌが私をこわがらせたとしても、私は大変アンヌを尊敬していたから——などが、私たちを結びつける唯一のものだった。とにかく、エルザの存在と、アンヌの教育についての意見とを考えあわせると、この突然の来訪は、いかにもまずい出来事のように思えた。

エルザは、アンヌの社会的地位についてさんざん質問したあげく、寝にいつてしまった。私は父と二人きりで残った。私は父の足もとの石段に來てすわった。父はかがんで両手を私の肩にかけた。

「どうしてそんなに元気がないの？　　はくの可愛い

子、お前は野性の小猫こねこのようだよ。はくはいい体つきをしたブロンドの娘がほしいよ。少し太った、陶器のような目をもった。そして……」

「そんなこと問題じゃないわ」と私は言った。「なぜアンヌを呼んだの？　　そしてどうしてあのひとは承知したんでしょう？」

「お前の年とった親父さんに会うためかも知れない。そういうことだってありうるさ」

「でも、お父さまはアンヌの興味をひくようなタイプの男じゃないわ」と私は言った。「だってあのひとは頭がよすぎるし、そしておまけに気位が高いわ。それにエルザは？　　お父さまはエルザのことお考えになった？　　アンヌとエルザの会話、想像おできになって？　　私にはできないわ」

「それは考えなかった……」と父は素直にみとめた。「そうだ。そいつは大変だ。セシル。……パリに帰ってしまおうか？」

父は、私の首すじにさわりながら、静かに笑った。私はふりかえって父を見つめた。父の黒い瞳ひとみは光り、

おかしな小さな皺が目のまわりを刻み、唇が少し上に
そりかえていた。父は牧神のようだった。私たちは
一緒に笑いだしてしまった。父が面倒なことをひき起
こすたびにいつもするように。

「ぼくの可愛い共犯者」と父が言った。「お前なしで
はぼくはどうなるだろう？」

父の声の調子があまりにも思いつめた、あまりにも
優しい調子だったので、私は、父が私なしでは本当に
不幸だったろうと思った。夜おそくまで私たちは、恋
愛について、そしてその複雑さについて、語りあっ
た。父にとって、それらは想像の上だけのものだっ
た。父は貞節、ことの重大さ、責任、などという観念を
わざとしりぞけていた。それらはほんとうは理由のな
い、実を結ばないものだと言明した。それが父以外の
人だったら、きっと私は憤慨したにちがいない。けれ
ど私は、父の場合、そういう態度が優しさや、献身を
除外するものでないと知っていた。父はそういう感情
が、かりそめのものだということを知り、またそうであ
ることを願っているだけ、そうした気持ちに自然にな

るのだった。この父の恋愛観は私を魅惑した。花火の
ような、はげしい、一時的な恋愛……。私は貞節とい
うものに魅惑される年ごろではなかった。私は恋愛のい
ろいろなことについてはほとんど何も知らなかった。い
くつかの逢びき、接吻、そして倦怠などをのぞいては。

第二章

アンヌは一週間以内には着く予定ではなかった、私
は真の夏休みの最後の数日をゆっくり楽しんだ。私た
ちは別荘を二カ月間借りていた。しかし私は、アンヌ
の到着とともに、完全なくつろぎというものが不可能
になることを知っていた。アンヌはものごとをはっき
りとさせ、言葉に、父や私ならわざと知らぬふりをす
ることにも意味を与える女だった。彼女は良い趣味と
繊細さの境界線をはっきり置いた。それで、私たち
は、彼女の突然の閉じこもり、傷つけられた沈黙、表
情、そういうものの中にその境界線が破られたことを
見てとらざるをえなかった。これは刺激的であると同

時にわずらわしく、結局は屈辱的なことであつた。なぜなら、彼女が正しいことを私は感じていたから。

アンヌが着くという日、父とエルザとがフレジュスの駅まで迎えに行くことに決まつた。私はこの遠出に加わることをどうしてもいやがつた。父はくやしきまでに、汽車から降りたつた時の彼女に捧げるため、庭のグラジオラスの花をみんな摘みとつた。私は、花束をエルザに持たせないように注意するのがやつとだつた。

三時、父たちが去つた後、私は海辺に下りた。たえがたい暑さだつた。私は砂の上に横たわつてうとうとした。シリルの声におこされた。私は目をあけた。空は暑さのために白くかすんでいた。私は返事をしなかつた。私はかれとも、だれとも話したくはなかつた。私は、この夏の精一ぱいの力で、砂の上に釘づけにされてゐた。重い両腕と、渴いた唇と……。

「死んでゐるの？」とかれは言つた。「遠くからだ、すてられた残骸のように見えたよ」

私は微笑した。シリルは私の傍に腰をおろした。私の心臓は荒々しく、ひそかに打ちはじめた。なぜな

ら、かれが動いた拍子に、その手が私の肩に軽く触れたからだつた。先週、元氣いっぱいの海軍演習のように、私たちは何回も、お互いにもつれ合つたまま水の奥底ふかく沈んだけれど、私は何の胸さわぎも覚えなかつた。それなのに今日は、ただこの暑さだけで、この夢うつつだけで、この不器用な仕草だけで、私の中にある何かが優しく引きさかれてしまつたのだ。私はシリルの方に顔をむけた。かれはじつと私を見つめていた。私はシリルという人がわかりはじめていた。かれは年のわりに人並みより平均がとれていて、真面目だつた。だから、私たちの状態——この奇妙な三人家族——がかれを驚かした。シリルはそれを口に出して言うには親切すぎるか、または遠慮しすぎているかのど

ちかだつたが、私は、シリルが父をながめる時の横目の不満そうな眼ざしで、そうと感じた。シリルは私が悩んでゐることを望んだらう。けれども私は悩んではいなかつた。今たつた一つ私を悩ましてゐるのは、かれの視線と、私の心臓の強い鼓動であつた。シリルは私の上にかがんだ。私は先週の数日間のシリルに

たいする自分の信頼と、平静さを思いだした。そしてこの長くて少し重い唇の近づいてくるのを残念に思った。

「シリル」と私は言った。「私たちはあんなに幸福だったのに……」

かれは私を優しく接吻した。私は空をみつめた。それから私は、強くつぶった險きよたの下、きらめく赤い光しか見えなかった。暑さ、放心、最初の接吻の味、ため息のうちに長い何分かがすぎた。自動車のクラクションが、私たちを泥棒たちのように離れた。私は一言もいわずシリルを離れ、家の方へと登っていった。この早い帰宅が私を驚かした。アンヌの汽車はまだ着いているはずがなかった。

ところがテラスには自動車から降りたったアンヌが立っていた。

「この家は『眠りの森の美女』の家なの？」と彼女は言った。「あなた焼けたわね。セシル!! 私、あなたに会えてうれしいわ」

「私もよ」と私は言った。「だけどパリからいらっし

やったの?」

「私、車で来たかったの、おかげで私とても疲れちゃったわ」

私はアンヌを彼女の部屋に通した。私はシリルの船が見えないかなと思いつながら窓をあけたが、もう見えなかった。アンヌはベッドの上に腰をおろした。私は彼女の目のまわりの小さな影に気がついた。

「この別荘は素晴らしいわ」とアンヌはつぶやいた。「お父さまはどこ?」

「お父さまはエルザと一緒に迎えに駅にいったのよ」

私はスーツケースを椅子いすの上にのせた。そしてアンヌの方をふりむいた、とたんに私はショックを受けた。彼女の顔が急にゆがみ、唇がふるえていた。

「エルザ・マッケンブル? お父さまはエルザ・マッケンブルをここに連れてきていらっしやるの?」

私はなんと返事してよいかわからなかった。私はびっくりしてアンヌを見つめた。いつも見なれていた、非常に落ちついた、冷静なこの顔を、このように私の

驚きの前にさらすとは……アンヌは、私の方を見つめていたが、私の言葉がもたらしたいくつかの影像を見ていたのだ。彼女はやっと私が見えたらしく、顔をそらした。

「私、前もってお知らせすべきだったわ」と彼女は言った。「でも私とても出発するのを急いでいたものだから……私とても疲れていたもので……」

「そして今……」と私は機械的に続けて言った。

「今が何？」と彼女は言った。

質問するような、軽蔑したような視線だった。もう何ごとともなかったかのようだった。

「今、お着きになったのだから……」と私は両手をもみながら馬鹿ばかのように言った。「私、あなたがいらっしやったこととてもうれしいわ。階下したでお待ちしているわ。何かお飲みになりたいのだったら、バーにはなんでもあるわよ」

私はもぐもぐいいながら部屋を出た。そして混乱した頭で階段をおりた。あの顔、あのとり乱した声、あの落胆はどうしたというのだろう？ 私はデッキチェ

ヤーに腰をおろして、目をとじた。私はアンヌのすべでの、きつい、信頼感を起こさせる顔つきを思いだそうとした。皮肉、自信、権威……。あの傷ついた顔を見いだしたことは、私を感動させ、同時にいらいらさせた。アンヌは父を愛しているのだろうか？ 彼女が父を愛しているなんてことがありうるだろうか？ 父の持っている何ものもアンヌの趣味にあったものはない。父は弱く、女たらしで、時には意気地がなかった。けれども、もしかしたらあれはただ旅行の疲れか、道徳的な怒りいらだったのか……私はさまざまな仮定に一時間をすごした。

五時に、父がエルザと帰ってきた、私は父が自動車からおりるのをながめた。私は、アンヌが父を愛するなんていうことがありうるかどうか知ろうとした。父はいそぎ足で、頭を少しくしろにそらせながら、私の方に歩いてきた。父はほえんだ。私はアンヌが父を愛していること、そしてだれもが父を愛しても不思議ではないと考えた。

「アンヌはいなかったんだ」と父は私に叫んだ。「汽

車のドアから落ちてしまったんじゃないだろうね」「お部屋にいるわ」と私は言った。「アンヌは車で来たの」

「本当かい？ そりゃ素晴らしい！ お前は花束を上にかけていってくれ」

「花束を私に買って下さったんですの？」とアンヌの声が出た。「まあご親切ね」

彼女は、旅行をしてきた服とも思われないような服に身をつつんで、くつろいだ様子で、ほほえみながら、父に会うため階段をおりてきた。私は彼女がおりて来たのは車の音を聞いたためであって、私と話すためにもう少し早くおりてきてくれて良かったのに、ときびしく考えた。私が落ちてしまった試験のことについてでもいいから……。しかし、この最後の考えが私をなぐさめた。

父は大急ぎで近づいて、アンヌの手に接吻した。

「私は駅のプラットフォームで、この花束をかかえながら、馬鹿のような笑いを浮かべて、十五分も待ってたんですよ。ああ良かった。あなたがいらっしゃって

……エルザ・マッケンブル、ご存じですか」

私は目をそらした。

「私たちお会いしたはずですわ」アンヌは非常に愛想よく言った。「私のお部屋、すてきですわ。お招き下さって、本当にご親切すぎるわ。レエモン、私、とても疲れていたんですの」

父ははしゃいでいた。父の目には万事がうまく行っていた。父はしゃれた会話をしたり、お酒の栓をぬいたりした。けれども私は、情熱的なシリルの顔とアンヌの顔……この二つの、はげしさに刻まれた顔が、かわるがわる目に映った。そして私は父が言ったように、はたして夏休みはそう簡単にすぎるだろうか、と自問した。

この最初の夕食はとても陽気だった。父とアンヌは、少数だが華やかな、かれらの共通の知人の話をしていた。アンヌが、父の共同出資者は少し頭が足りないという時まで、私はとてもたのしかった。この男は酒飲みだったけれど、親切で、私たち——父と私は、忘れがたい数々の夕食を共にしたのだった。